

1	チーム名 (研究対象領域・教科) 家庭訪問学級チーム			
2	メンバー	小学部教員 2名、中学部教員 1名、高等部教員 1名		
3	チームのテーマ 児童生徒が教師とのやりとりを通して、興味・関心をもって活動しようとする授業作り			
4	対象児童生徒に願う主体的な姿 教師や周りの人とのやりとりを通して、何をするのが分かり、興味・関心をもって活動に取り組もうとする姿			
5	研究仮説① 児童生徒の実態を把握し、興味・関心をもって活動に取り組む姿を検討し、指導へのアプローチを工夫することで、児童生徒が興味・関心をもって活動に取り組もうとするような授業を行うことができるのではないかな。			
6	研究実践の内容① (1) 家庭訪問学級の教師がお互いの授業を見学し、複数で児童生徒の実態把握をする。 (2) 事後の授業についてねらいを確認し、ビデオを見て授業の振り返りを行う。 (3) 児童生徒の学習の様子や教師のかかわりについて、随時、意見交換し、授業改善に生かす。			
	① 小3 児童A	② 小5 児童B	③ 中1 生徒C	④ 高3 生徒D
単元・題材名	「つくる」	「振り返りの学習」	「ふれる」「つくる」	「始まりの会」
学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ハーブのにおいや感触を感じながら、教師の支援を受けて手のひらや指先を使って活動する。 ・完成したポプリをお母さんに手渡す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動の振り返りをおして、その時や現在の自分の気持ちを教師に伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・足湯を行い、ハーブの匂いをかいだり、お湯の感触、温度を感じたりする。 ・指先を使ってのりを塗り、七夕飾りをつくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習内容の理解と自己調整。(心理的な安定・人間関係の形成) ・文字や英単語を理解し読む。(環境の把握)
工夫した点	<ul style="list-style-type: none"> ・「つくる」だけでなく、母親にプレゼントする活動を取り入れることで、本児からの表出を促すようにした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・iPadのトーキングエイド(指電話)やシンボルを活用し、本人が伝えたいことを自分で選んで表出できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・水音やハーブの匂いを手がかりとして、足湯を行うことを本人がわかるようにする。 ・のりの感触を確かめる時間をつくることで、活動内容をわかるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・見えやすい環境作りとして、書見台を用いる。 ・生徒の発信を受け止める機会を重ねることで、生徒の「伝える」意欲を支える。 ・テンポ、具体物の提示、文字情報の支援は生徒の発信に合わせるようにした。
児童・生徒の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・ハーブのにおいや手触りを感じているような表情(眉の動き)が見られた。 ・「お母さん、ありがとう」という教師の言葉に重ねるようにし 	<ul style="list-style-type: none"> ・操作の仕方や(シンボル、言葉等)伝える内容は理解しているが、iPadの別のアプリで遊びたいという気持ちが強く、動画や画像のアプリを起 	<ul style="list-style-type: none"> ・水音を聞くと、足を動かしてバケツを探していた。 ・自分からバケツに足を入れていた。 ・のりの容器の縁へ教師が指先を誘導する 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒のできる内容が増えることで、①発信が増える。②「始まりの会」以降の学習に対して興味を持つことや自信を持つことができるようになってきた。

	て、本児が口を動かす表出が見られた。	動させてしまうことが多い。結果として「やりとり」にはなりにくいことが多かった。	と、指先を動かしてのりを触ることができたが、手を伸ばすことは難しかった。	・教師とのやりとりの中で、生徒が内容を理解し、処理し、自己調整する「間」が大切であった。
メンバーからの意見等	<ul style="list-style-type: none"> ・お母さんを授業に巻き込んだことで、本児の意欲が引き出されたのではないかと。 ・授業の構成が分かりやすいため、本児の反応が出やすいと考える ・眉を上げる表出が本児にとって本当にYesの意味なのか、確かめるために同じ活動を繰り返すことも必要ではないかと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・iPadを使うことが目的なのではなく、それをとおして本人が豊かなコミュニケーションを身に付けることがねらい。コミュニケーションをとる相手との信頼関係が基本である。 ・「ほめられて嬉しい」など、本人の気持ちを高めていくことと併せて、ツールを活用してはどうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本人が「やりたい」と思うように、教材を置く位置を工夫したり、固定したりする。 ・制作をするときは、できあがり平面だとわかりにくいので、立体的なものや描いたものの跡がわかるようなものがよい。 ・発達段階として、感触遊びを思いきりやり、その後制作につなげていくのもよいのではないかと。 ・本人は、予測をしながら学習に取り組んでいる。予測通りに進むことで、気持ちの安定につながると思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・担任の学習内容提示の際、言語での説明を理解していない時とその学習に苦手意識がある時の見極めが大切である。 ・これまでの信頼関係が基本となっている。あらゆる場面で教師の支援の幅を変えることで、生徒も自己調整して主体的に学習する意欲が育まれる。

7 成果と課題

<成果>

研究実践の結果、児童生徒が興味・関心をもって活動できるような題材を設定し、指導へのアプローチを工夫することができた。

成果として、教師や母親とのやりとりをとおして、児童生徒が何をするのが分かり、意思の表出が見られたり、すすんで活動に取り組もうとしたりする姿が見られた。

<課題>

家庭訪問学級の教師は、学校でのスクーリング以外は常に1人で授業を行う。そのため、客観的に授業を振り返ることが難しく、悩みを抱えやすい。そのため、家庭訪問学級の先生と授業を振り返る機会をお互いにもち、授業のビデオや写真を見て、意見交換する機会を大切にしている。

家庭訪問授業は、母親の協力によって授業の進行がスムーズになり、児童生徒の活動が広がったり、理解が深まったりすることがある。そのため、本人だけでなく母親にとっても、分かりやすい授業の内容、ねらい、手だてを考えて授業を行う必要がある。このことがよりよい授業作りにつながると考える。

また、児童生徒の学習の様子を担当が他の先生方に話すことで、家庭訪問学級の児童生徒を理解してもらう機会を作ったり、スクーリングの際に、子ども同士だけでなく他の先生ともかかわる場を設定したりすることで、家庭訪問学級の児童生徒の興味・関心や活動の幅がさらに広がることを期待する。

